

# 収容者番号99728番の男

## — カロリン・オッター監督来日の記録 —

### 大友 展也

ここに一枚のDVD<sup>1)</sup>がある。これは、一昨年(2010年)の11月に監督が来日した際に行われた日独ライブ対談の様子を監督自身が撮ったものである。女史は、ホロコーストを体験し現在も語り部としてその名を広く知られているマックス・マンハイマー氏のドキュメンタリー映画を製作した監督である。この映画はミュンヘンの国際映画祭で上映された。そして国際基督教大学準教授のG・スーヤック女史の尽力により、日本語版が制作され、国際基督教大学をはじめ、東京外国語大学、上智大学、広島市中区地域福祉センターにて上映会や日独ライブ対談が開催された。紙幅の関係上、また筆者も最後まで同行したわけではないので、代わりに南ドイツ新聞などの紹介記事を邦訳して記載することにする。その他、90歳の卒寿をお祝いした際の記事もその一部を記載し記録としたい。

### 広島から届く手紙

ヘルムート・ツェラー (南ドイツ新聞記者)

時代の証人マックス・マンハイマー氏は、アウシュヴィッツやダッハウについて25年も前から生徒たちに語り続けてきた。今や、マンハイマー氏は日本でも注目される人物になった。だが最近では、氏と対談するのは以前よりも難しくなってきた。この度のライブ対談では、国際

---

1) Der weiße Rabe in Japan : Videokonferenzen: Tokyo-München (4.11.2010) Hiroshima-Waldmünchen (9.11.2010)

ダッハウ協会の副会長で90歳になる氏がまず日本語で話し出すと、質問者はその予期せぬ言葉に驚き、氏はその表情をみて心から嬉しそうに笑いながら自己紹介した。12以上の言語で話して見せる、語学力に秀でたマンハイマー氏にとって、ちょっとした日本語を話すことくらい何の造作もないことなのだ。それは、氏の手記『追憶の日記』(Spätes Tagebuch)とカロリン・オットー監督の『白いカラス』(Der Weiße Rabe)を大変好意的に受け入れてくれた日本に対する彼なりの感謝の表現なのである。25年前からマンハイマー氏は、数千人にも上る生徒たちの前で直接アウシュヴィッツやダッハウについて話すことで、彼らの想像力を大いに刺激し強い共感を勝ち得てきた。そして今回、氏も監督も当初は確信が持てなかったのだが、日本の生徒や学生たちの心も大いにとらえることができたのである。

11月以来、毎週、東京や広島、横浜、京都からマンハイマー氏の郵便ポストに手紙が届くようになった。二人の生徒は次のように書いている。「あなたのお話にとっても感動しました。またあなたのジョークもすばらしく、とりわけカマスの話が気に入りました。」ちなみにオットー監督がそれを実に見事に描写している。6つの大学や高校、教育施設にてカロリン・オットー監督は、氏が長距離の旅行をするのは体力的に無理だろうという判断から、氏不在のまま上映会を行った。監督はこう話している。「私はマンハイマー氏のメガホンであり、メッセンジャーなのだ」と。メッセンジャーになるというのは、映像を重視した監督の繊細な作風からみても最善の選択であったのだ。監督として日本の観衆との出会いを緊張しつつ待った。そして大きな反響を得たのである。

90分に亘る長編ドキュメンタリーには字幕が付けられているが、マンハイマー氏の述べたことのニュアンスや深い意味を完全には伝えることができなかつた。だが観客は、映像自体が持つ力によって人間マンハイマーとその人生をドイツ語話者と同様に完全に理解できたようだ。例えば、シスター・エリヤとマンハイマー氏が何十年も続いてきた友情について語っている挿話がそうだ。オットー監督は、修道服を身にまとい

たカルメル修道会の尼僧をマンハイマー氏の横に座らせ、地味だが焦点を外さないカメラワークによって二人が自発的に話すよう促した。いかなる宗教的境界線をも超えて結ばれた二人の固い絆が、憎しみをも克服してしまった氏の姿と相まって観客に強い印象を残したのだ。

2回催されたライブ対談において氏は、ダッハウのマックス＝マンハイマー研究センターから日本の生徒や学生に向けて、また広島の被爆者に対して語りかけた。13歳で被爆した男性は、1990年にアウシュヴィッツを訪問した体験を述べ、ホロコーストを原爆投下と同様に人類に対する最悪の犯罪行為と称した。その男性は、これからも青少年に被爆体験を語り続けるのだ、と語気を強めてマンハイマー氏に述べた。アウシュヴィッツと広島では、政治的にも歴史的にも根本的に違いがあるにせよ、マンハイマー氏は、人類が体験したこの二つの体験から一つの義務を導き出す。「われわれは皆、平和と人道のために働く義務を負っている」

2009年に氏の手記を日本語に翻訳した大友展也教授も、大きな反響をよんだ今回のマンハイマー＝日本ツアーについて心から喜んでいる。教授は、ナチズムについてあまり知識を持っていない日本の若者にはホロコースト問題と真正面から向き合ってもらいたい、と望んでおり、その為には、マックス・マンハイマーとカロリン・オットーの二人こそ適任だと話した。ナチスの側についていた日本が自らの罪とどう向き合っているのか、監督はそのこともぜひ知りたいと思った。それは監督自身が抱く苦しみでもあるが、それが今回テーマとなることはなかった。だが監督は、それを歴史に対する認識不足だと指摘するために来日したわけではないのである。

### 一本のリンゴの木は育ち、やがて実を結ぶであろう

カロリン・オットー監督は広島で日本のリンゴの木を一本、マックス・マンハイマーの名前で記念となる場所に植樹した。マンハイマー

氏自身は、そこに、ダッハウに収監されていたリング牧師のコルビアン・アイグナー種<sup>2)</sup>を植えたかったのだが、持ち込みが税関規定により制限されていたので叶わなかった。植樹式に際しては、平和教育のために集められた120名の生徒が歌を歌った。広島市の市街地には、原爆投下の後も枯れなかった約30本の樹木が立っている。この「生き残った木々」はわれわれに対する警告でもある。マンハイマー氏のリングの木は成長し、実を結ぶであろう。(Helmut Zeller : *Briefe aus Hiroshima*, Süddeutschezeitung, 8./9. Januar 2011, Nr.5/Seite R5)

## アウシュヴィッツと広島の証人たち

強制収容所元収容者マックス・マンハイマーと広島の被爆者が歴史の忘却と闘う。日本とライブ対談

ヴァルフ・ヒーオブ (ヴァルトミュンヘン紙編集者)

アウシュヴィッツ強制収容所を生き延びた90歳のマックス・マンハイマーは人類に対する犯罪を忘却の彼方に風化させないように飽くなき闘いを続けてきた。25年前から氏は歴史の証人として学校などで自らの体験を語るという苦勞を厭わずに講演を引き受けてきた。マックス・マンハイマーは告発者としてではなく、自由で民主的な基本秩序<sup>3)</sup>を強めるために過去の記憶を褪せさせないようにすることを自らの課題とした。

注2) コルビアン・アイグナー (Korbian Aigner 1885-1966) は、バイエルン出身の牧師でリングの品種改良に取り組み、ダッハウ強制収容所で「コルビアン・リング」を開発したことで知られている。今日、親しみを込めてリング牧師と呼ばれている。1941年、ダッハウに移送され、牧師専用の収容棟に収監された。そこでは主に農作業に従事させられた。バラックとバラックの間にリングの木を植え、そこで数種の新種の開発に成功した。そのうちKZ3という品種は戦後「コルビアン・リング」と正式に命名され、今日も流通している。アイグナーの功績を讃えてバイエルン州政府はバイエルン功労勲章を授与した。また彼の名前を付したギムナジウム (中等・高等学校) もある。マンハイマー氏はもちろんこの逸話によってコルビアン・リングの苗木を植えたかったのだ。苗木は広島市立基町小学校の校庭に植えられた、と聞いた。

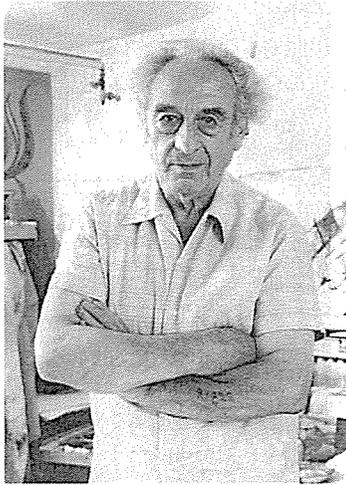
注3) 自由で民主主義的な基本秩序とは、ドイツ連邦共和国基本法第21条第2項の一節。国の存立を脅かすような政党や党員の行動は連邦裁判所によって違憲かどうか判断できるようになっている。マンハイマー氏はネオナチのグループにさえ対話と呼びかけたことがある。

商業高校における2時間ちかい朗読でも、活力にあふれたこの90歳の老人は、驚くべきことに1985年に出版された自著『追憶の日記-テレージエンシュタット-アウシュヴィッツ-ワルシャワ-ダッハウ』を一度も手に取ることがなかった。氏はどのような経緯でホロコーストへ到ったのか語った。その兆候はかなり前から現れていたという。氏は歴史をさかのぼり、日付からヒトラーのミュンヘン一揆の失敗について知っていた1人の生徒には50点を与えた。「後の独裁者は当時監獄の中で、ユダヤ人の撲滅を



原著（Spätes Tagebuch）の表紙画像

予告した『我が闘争』を書き上げた。今日《ヒトラーは権力を掌握した》と表現されることがよくあるが、実は財政的かつ政治的な支持を受けて首相に任命されたのだ、その上で政敵や見た目の異なる者、思想・信条・宗教の異なる者に対して報復を開始したのである」と述べた。高齢にも関わらず若者のもとへとマンハイマー氏を駆り立てるのは、「君たちは起きてしまったことには責任がない。でも再び起きてはならないことに対しては責任があるのだよ」という信条である。それからマンハイマー氏は、ホロコーストの数百万人の犠牲者のことではなく、自らが体験したことを述べた。それで氏の話が現実味を帯びて伝わった。もちろんこの商業高校の講堂だけではなく、氏のメッセージは世界中に伝えられたのである。その際、氏の著書が役立ったのは言うまでもないが、ここ数日間日本の大学で上映されているカロリン・オットー監督のドキュメンタリー映画『白いカラス-マックス・マンハイマー』も大いに貢献している。日本の若者も時代の証人とぜひ対話したいと思っていた。だが90歳の老人には9,000キロもの旅路は難しい。それで青少年会館の講堂で広島とのライブ対談が企画されたわけだ。だがこのライブ対談も結果



ポートレート (© Carolin Otto)

老人が1990年にアウシュヴィッツを訪れたことや、その時の心情などが紹介された。その老人は強制収容所におけるホロコーストを原爆投下とどうよう非人道的であり人類に対する犯罪であると糾弾し、マックス・マンハイマーに「青少年に自らの体験を語ることを止めてはならない」と叫んだ。その点においては老人とマンハイマー氏の考えはまったく変わらない。次にマンハイマー氏が、憎しみや怒りの感情を持つことなく、これからも原爆の恐ろしさを伝えてほしい、と述べ、「われわれは皆、平和と人類のために働くという使命を担っている」と付け加えた。(Wurf Hiob : *Zeugen von Auschwitz und Hiroshima*, Waldmünchen, Lokalteil für den Altlandeskreis · www. Mittelbayrische.de, 10. November 2010, Seite 33)



ライブ対談に臨むマックス・マンハイマー氏  
(記載記事から転写 : Wurf Hiob)

次に掲げる記事 (Thema des Tages : Bewahrer der Erinnerung,

Dachauer SZ , 7. Februar 2010, Nr. 306 / Seite R2) は、マンハイマー氏の 90 歳の誕生日を祝う南ドイツ新聞ダッハウ版の特集記事 (2010 年 2 月 10 日) である。その際、筆者も執筆者の 1 人に選ばれた。ドイツ語教員として傍観者的な立場でドイツ語やドイツ文化を教えてきたが、氏との交流を通じて初めて生きた歴史の一端に直に触れることができ、大変光栄である。思えば、中高生の頃は戦争物の映画やドラマが好きでよく観ていたし、プラモデルでドイツ軍タイガー I 型戦車も造った。コンバットはお気に入りの番組だった。もちろんアンネの日記も読んだ。その 30 数年後にまさか本当にその時代を生き、ホロコーストを体験した人物と出会い、交流を持つことになるうとは想像すらしていなかった。きっとマンハイマー氏の歴史を伝えなければ、という強い意志が見えない縁を次々と生み出し、日本にいる私にまで届いたのかもしれない。それは、ガス室で命を奪われた氏の家族の声なのかもしれない。残された一枚の家族写真。マンハイマー氏が収容所の中でベルトに挟んで隠していた写真。その中に写る 1 人の少女。短い命だったが、今、日本で青年に手記が読み継がれることで新しい命を吹き込まれたのである。

では、執筆者の中からカロリン・オットー監督とホルスト・ケーラー元大統領、そして筆者の寄稿文を記載することにする。

### 今日のテーマ：記憶を伝える人

マックス・マンハイマーは、テレージエンシュタット、アウシュヴィッツ、ビルケナウ、ミュールドルフ、ワルシャワゲットーの各収容所を生き延びた — 当時のチェコスロバキア・ノイティツチャイン出身の、とあるユダヤ人家族。その中で生き残ったのは弟のエトガルとともに 2 人だけだった。

両親と妹、2 番目の弟、妻がドイツ人によってガス室へ送られた。年月が経ち、ようやくホロコーストや自らの運命と向き合い、起きたことを伝えていこうという力を得ることができた。それ以来マンハイマー氏

は、反ユダヤ主義や極右的な活動家と闘い続けてきた。氏は時代の証人としてドイツ国内や外国でその名を知られるようになり、彼の活動は高い評価を得た。同士や友人、ホルスト・ケーラー大統領、マンハイマー氏の活動に賛同した人が氏の90歳の誕生日をお祝いする。南ドイツ新聞ダッハウ版もここに祝辞を表明する。

## 歴史家、しかも魅力的な

カロリン・オッター（映画監督）

それは、1988年11月7日のことでした。私はこの日、私の全生涯に影響を及ぼすことになるひとりの人間と出会うなんて予想すらしていませんでした。私はこの度制作したドキュメンタリーをその人に捧げます。深い絆が私達を結びつけることでしょう。

11月7日に帰宅したとき、私はまたダッハウの市街電車駅へ向かう羽目になりました。銀行から電話があったのです。私のキャッシュ・カードが発見されたという。それを知らされるまで私は、ダッハウでカードを紛失したなんて、まったく気がつきませんでした。私は、その際教えてもらった電話番号に電話しました。電話に出たのは、ひとりの親切な男性でした。カードは、ミュンヘン中央駅に隣接する皮革製品販売店の中で受け取ることになりました。もしその発見者が親切ならコーヒーをおごり、そうでなければ花だけ渡すつもりでサーモンピンクのバラを持参しました。実際お会いしてみるとマンハイマー氏は大変魅力的な人で、私は話にぐいぐいと引き込まれていきました。私は、映画専門大学で学んでいることを話し、彼は私に「まあ自分は歴史家みたいなものだ」と



マンハイマー氏の90歳を祝う特集記事

言いました。彼は自分の人生について語りました。今晚、講演をするという。私も誘われました。ある何かが少しずつ明らかになってきました。明後日は「水晶の夜」が起きてからちょうど50周年になる。ダッハウだって？ 彼の年齢もピッタリと合う。その時、ハッとひらめいたのです。彼は強制収容所にいたのだ。ユダヤ人なのだ！その晩、彼の話聞いたとき、心を揺さぶられました。たとえその話を講演会や彼の著書の中で、またフィルムの編集をしている時でも映画上映会でも500回聞いてもその都度、感動したことでしょう。マンハイマー氏にはいつも驚かされます。ナチのしたことを特に若者に対して話す活動には、なんと人生の三分の一も捧げているのです。しかも憎しみの感情からではなく、ユーモアで聞く者の心を大いに揺さぶるのです。マックス・マンハイマー氏は他の人々をこうだ、と決めつけることはなく、自分自身さえ笑いの対象にしてしまうほど一かなり下品になることもありますが一寛容的な心の持ち主なのです。「このカード、君の財布から落ちたんだよ」「ありがとう！」マックス！誕生日おめでとう！

### 私達に課せられた責任

ホルスト・ケーラー（ドイツ連邦共和国連邦大統領）

マックス・マンハイマー氏の90歳のご誕生日に心から祝詞を申し上げます。

私は氏に何度もお会いしました。その都度、氏の人柄に接し、深い感銘を受けました。マックス・マンハイマーは、国家社会主義者たちによる恐怖政治を生き延びました。氏は、自分を抹殺せんとする者から逃れ、まさに最後の瞬間にアメリカ兵らによってダッハウ強制収容所から解放されました。そんな体験をしたにもかかわらず、ホロコーストの生き残りとしての責任を負うことを自らに課したのです。それは、消すことのできない99728番という収容者番号が自分の腕に刻み込まれているからだけではなく、自分が何を体験し苦しんだのか若い人々に語る

ことを残された人生の課題にしたからです。マックス・マンハイマーは学校や自治体の講堂で、呼ばれればどこへでも行って、話します。いつでも彼はやって来るのです。彼は告発者や裁判官として来るわけではありません—仮にそうだとしても誰も批判はできないでしょうが—、彼は証人として来るのです。そして聴衆の全身全霊に語りかけるのです。つまり歴史の授業を自らが体現しているのです。とりわけそのことを感謝いたします。起きたことを—まさにダッハウというこの地においても—決して忘れさせてはならないという氏の不撓不屈の精神に頭が下がりますし、戦後の荒廃したドイツにとどまって下さったことにも感謝申し上げます。氏の言葉によって、我が国にすばらしい未来が待っているのだと私達は確信することができたのです。氏は私達に手を差し伸べました。氏の生き方をみて私達は、自ら果たすべき責任を自覚するのです。

### 私達が学ぶべきこと

大友展也（大学教授）

まず最初に、90歳のお祝いを申し述べたいと思います。日本には、古来から90歳を「卒寿」と呼んでお祝いする習慣があります。長寿社会といわれる現在の日本社会でも卒寿を健康な状態で迎えられる人は必ずしも多くはありません。3ヶ月しか生きられないと言われた収容所をマンハイマー氏は、家族のほとんどを失いながらも奇跡的に生き延びました。それから64年たくましく生きてこられたのです。その「生きている」という氏の存在自体が、絶滅を意図したホロコーストに対する完全なる勝利を意味するのではないのでしょうか？

2年前に氏に初めてお会いしたとき、自ら車を運転しホテルまで迎えて来て下さいました。収容所では、色々な国からたくさんの見学者が来ていました。氏は若い人がいれば誰彼と無く「君たち、どこから来たの？」と屈託なく声をかけ、その場で体験談を話し始めました。氏は私を近くの街にも案内してくれました。そこに5人くらいの少年や少女たちが遊

んでいました。氏はさっそく「僕を誰だか知っているかい？」と声をかけたのです。それは、戦争体験を伝えようという氏の堅い信念が感じられる一瞬でした。私は、このような氏の生き方に心から敬服致します。

ここ日本でも、戦争体験を次の世代にどう伝えていったらいいのか、ということが最近話題となることが多く、メディアが様々な取り組みを行っています。ドイツ言語文化を学生に教える私も、ゲーテやベートーベンなどのすばらしい文化を伝えるだけではなく、歴史の負の側面も正しく伝えることが大切だと思い、氏の体験談を日本語に訳しました。とりわけ氏の元に戻ってきた一枚の家族写真のエピソード。平和の大切さや人間の尊厳を教えてくれる一枚の紙。戦争はすべてを破壊しつつし、人々から何もかも奪い取ってしまいます。でもどんなに卑劣な手段を尽くしても、決して家族の思い出だけは消すことはできなかったのです。日本の青少年たちは、この翻訳をつうじて大切なことを学ぶことでしょう。

日本では、卒寿の次に白寿という 100 歳のお祝いが続きます。その時がくるまで、ご健康をお祈り申し上げます。

**白いカラス**  
監督作品 カロリン・オットー

ドイツ映画 (文庫・日本語字幕付き)

ホロコーストの証言  
11月5日(金)

東京外国語大学  
アカコプラ・グローバル  
センター

プログラム  
13:00-14:20 カロリン・オットー  
14:30-15:45 映画 白いカラス  
(27)

15:45-16:30 討論 (45分)

参加者:  
カロリン・オットー (監督)  
ジェンツィエフ・スーヤック  
(国際基督教大学上級准教授)  
大友隆也 (岩手大学教授)  
討論司会:  
石橋 隆 (東京外国語大学教授)

協賛: 東京外国語大学大学院国際コミュニケーション  
国際センター

主催:  
国際基督教大学平和研究所  
ダハウ収容所ナリアルサイト  
駐日ドイツ大使館

協賛:  
Institut für Auslands-  
beziehungen e.V.

◆途中休憩 (長短編) 及び  
国訳多読 (20分) 終了後  
短編上映  
(上映時間から15分前)  
◆多読電音 (日本語訳あり)  
◆多読電音付録 (日本語訳) 付録  
『東京外国語大学』下車

東京外国語大学における上映会のポスター



オットー監督と写るマンハイマー氏(筆者撮影、2008年ダハウにて)

ホロコーストで命を失った人々の「戦争の無意味さや悲惨さを伝えたい」という無言の思いを代弁し、それを未来を担う若者に伝えていく活動に残りの人生のすべてを投じたマンハイマー氏には心から敬意を表したい。筆者も、オットー監督の映画上映会では、ほんのわずかではあるがお手伝いができたことを感謝し、この報告を終えることにする。

### 参考文献

Beitzer, Hannah: *Gymnasium Erding II, Neuer Name - Der Pfarrer, der im KZ Äpfelzüchtete*, <http://www.sueddeutsche.de>, München&Region, 28.06.2010,18:22

Mannheimer, Max: *Spätes Tagebuch Theresienstadt - Auschwitz - Warschau - Dachau*, 9.Aufl. Zürich:Pendo, 2007 (大友展也訳『 Ауシュヴィッツで起きたこと』角川学芸出版)

大友展也：強制収容所の記憶—マックス・マンハイマー、語り部としての人生、『世界』4月号（岩波書店）、2010年234-242頁

Otto, Carolin: *Der Weiße Rabe Max Mannheimer*, Mit Max Mannheimer, Edgar Mannheimer, Schwester Elija Bossler, Eva Faessler, Ernst Mannheimer, Ota Filip, Zdenek Posusta, Nobuya Otomo, Doris Laves-Wegat u.v.a., Untertitel Englisch © Carolin Otto Filmproduktion DVD Video, 2009, 82 Min (日本語字幕：大友展也、小松崎利明『白いカラス』カロリン・オットー・フィルムプロダクション)